

令和5年度 学生による地域フィールドワーク研究助成事業

研究成果報告書

- ・機関及び学部、学科等名 富山大学人文学部人文学科
- ・所属ゼミ 富山大学文化人類学研究室
- ・指導教員 藤本武、野澤豊一
- ・代表学生 高村将斗
- ・参加学生 井原唯花、大関宏弥、籠橋蒔乃、北朋乃実、田持友太郎、橋爪乙葉、森谷紗英

【若者に選ばれるまちづくりへの提案 地域調査を通じた氷見市の魅力発見と発信・交流】

1. 課題解決策の要約

本研究では、氷見市での現地調査を踏まえて以下の点が明らかとなった。まず、「若者に選ばれるまちづくり」に向けての課題として、氷見が雪国であることやすぐに住むことのできる空き家が少ないことが挙げられる。また移住してきても働き口が少ないという課題もある。一方で、魅力としては新鮮な海の幸が豊富で身近であることや獅子舞やまるまげ祭りなどの祭礼行事が盛んであること、移住者を歓迎する地域コミュニティの存在などが挙げられる。そこで、以下の提案を行う。まず、氷見の新鮮な海の幸や祭礼行事などをPRし、魅力発信につとめる。また移住希望者には異なる季節に何度か訪れることを勧めるとともに、すでに移住してきた人との交流の場を設ける。空き家修繕などにより、課題を解消することも必要である。移住者の生業として、起業を積極的に支援することで、新規事業の出店などを促進し、町の活性化を図ることをめざす。

2. 調査研究の目的

氷見市では現在、地域おこし協力隊等の活動により、県外からの移住者をサポートする取り組みが推進されている。とはいえ、少子高齢化とともに若年層を中心とした人口減少に直面している。また、海の幸を主とした食文化が知られるものの、「移住先」として知名度が高いとは言えないのが実情である。

そこで本研究では、フィールドワークを通じて地域住民への聞き取り調査を行うことで、氷見市に住む魅力や課題を明らかにする。氷見の魅力を探るとともに、課題を把握することでその解決策を模索する。そこから若い学生の視点を導入することで、若者に選ばれるまちづくりの提案を試みる。

3. 調査研究の内容

氷見市の現状と移住における課題

氷見市は古くから漁業が盛んで、港町として賑わってきた。近世前期には既に定置網の漁場が定められており、鱒や鮭、鰯など、現在も名の知れた海の幸の漁が営まれてきた。また、獅子舞が盛んに行われていたり、まるまげ祭りが行われたりするなど、祭礼行事も豊富な町である。

現在、氷見市の人口は約 42000 人(2024 年時点)である。戦後間もない頃は約 70000 人の人口があったがここ数十年人口減少が続いている。人口推移と年齢別人口割合は以下の通りである(図 1、図 2)。人口が減少し続けている現状において、地域住民への聞き取り調査をもとに「移住」という観点から氷見においてどのような課題があるのか考察する。

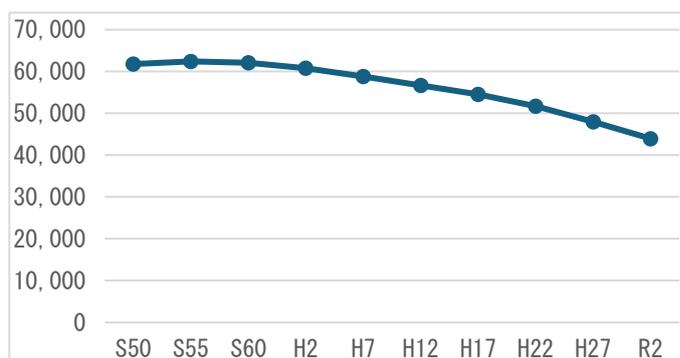


図 1 氷見市の人口推移(「令和 4 年の富山県の人口市町村別人口及び世帯数の推移」より作成)

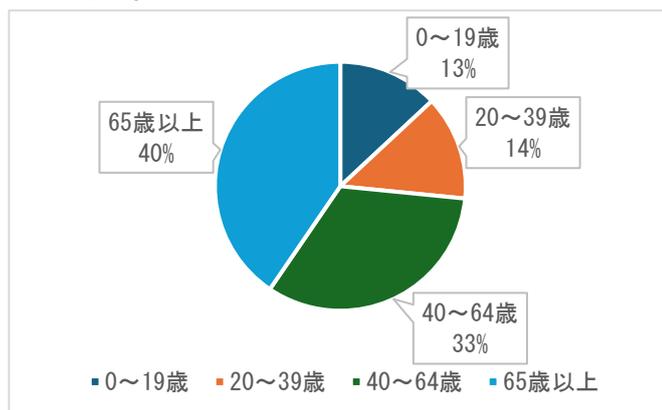


図 2 令和 4 (2022) 年氷見市の年齢別人口割合(「令和 4 年富山県の人口市町村別、年齢(各歳)別、男女別人口より作成」)

富山市から氷見市に移住したAさんは空き家問題について語った。富山県は1住居当たりの延べ床面積が大きく、氷見市も例外ではない。Aさんは氷見の空き家も比較的大きく、一人で住むにはもったいないと感じるような物件が多いという。一方で、「すぐに住める空き家が少ない」ともいう。氷見市の空き家は約 2500 戸(2018 年時点)ある。その多くは老朽化による破損など、修繕が必要な物件である。空き家は比較的安価に住むことができるというメリットはあるが、修繕が必要というデメリットもある。移住手続きが必要なことも含め、修繕が必要であることは、住みたくても、「すぐに住むことができない」という問題を引き起こしており、移住希望者の足止めになっている。

氷見への訪問と調査を進める中で、地域住民のBさんからは「『氷見に来て欲しい』と無責任に言うことはできない」という声が挙げられた。人口減少が進んでいることを憂慮する一方で、このような意見が挙げられるのは、冬季に雪が多く降るからである。移住を希望する人が雪になじみのない地域の出身であった場合、夏季の様子だけを見て移住を決断して後悔する、または冬季の様子だけを見て移住を断念する場合のどちらも考えられる。除雪作業が追い付かず、道路一面が雪で覆われてしまうときがあるため、雪に慣れていない人が氷見で生活するのは困難であるという。Bさんは氷見に移住を考えている人に対して、それぞれの季節を知るために「(気象や路面状況が)ひどいときのおためしが必要」、「4 回は来て欲しい」と考えていた。

また、氷見は「居住地」にはなっても「勤務地」になりにくいと考えられる。2020 年の国勢調査によ

ると、氷見市の夜間人口は約 44000 人であるのに対して、他市区町村で従業・勤務する人は約 10000 人である。およそ 4 人に 1 人が昼間は市外へと出ている。さらに氷見市が作成した 2017 年の転出先とその事由を見ると、氷見市民の転出先は男女ともに高岡市、富山市が多い。転出理由は、男性は仕事が一番多い。女性は婚姻が多く、次いで仕事となっている(「氷見市まち・ひと・しごと創生総合戦略の進捗と今後」(city.himi.toyama.jp))。これらのデータから、氷見は雇用面が充実していないことが推測できる。移住したくても働く場所がないというのが現状のようだ。また、前述したデータでは男女ともに約 6%と決して多いとは言えない数字となっているが、就学も若者の流出の原因となっていると考えられる。大学入学を機に氷見を出たまま帰ってこない若者は多いだろう。

上記のように氷見は勤務地にはなりにくいが、移住者の中には氷見で起業する人もいる。そのような移住者は雇われる仕事にはあまり興味がなく、現金収入が多少減ったとしても自営業を始める場合が多いと推測される。そして調査の結果、氷見では起業に対する支援が手厚いことがわかった。氷見で行われている起業支援について紹介する。

氷見市では新規雇用の創出及び定住促進を図るため、市内で起業する人を対象に事業所の開設費用などの初期投資費用や、顧客獲得のための情報発信に係る費用について対象経費の 1/2 を補助する補助金制度がある。さらに、まちなかでの賑わいの創出を図るため、空き店舗等を活用して新規出店する人を対象に、事業所の改装工事費、取得費などの初期投資費用について対象経費の 1/2 を補助する補助金制度を創設している。

他にも氷見市ではチャレンジショップという移住者に対する出店支援も行われている。この支援は 2021 年 3 月末に始まり、2024 年現在開設 3 年目である。開設当初は 3 店舗出店しており、それらは 2023 年春に活動を終えた。そのうち 2 店舗はまちなかに出店し、もう 1 店舗も活動を継続している。新たに 2 店舗が出店しており、開設以降計 5 店舗が営業している。2 年間の契約期間で顧客獲得や店舗運営の経験を積み、2 年後にまちなかで出店することを目標に支援されている。

また、中央町商店街には 2020 年以降新しくできた店舗は 5 つある。そのうち 4 つはパン屋、木材店、スープ屋、懐石料理屋であり、中には移住者が経営している店舗もある。中央町商店街はテナント料が安く新しく店を出しやすいというメリットがある。

氷見市ビジネスサポートセンターHimi-Biz は、セミナーの開催、窓口相談、地方支援雑誌と連携し都市部在住者と氷見の継者募集起業をつなぐ「オンライン交流会」、「現地交流会」の実施により、起業の支援をしている。Himi-Biz で開催されるセミナーのひとつに、「創業塾」というものがある。創業塾では座学による創業時に必要な知識などを習得する他、先輩創業者による創業の体験談、専門家によるビジネスプランのブラッシュアップや補助金や融資の資金調達の支援を行っている。中央町にあるシルクスクリーンの体験工房「FACTRY」は、実際に創業塾を受講し、空き店舗を利用して 2020 年に開業した店舗である。

また実際に商品開発の支援をした例もある。株式会社半七の幼児食セット「totokito」がその例である。子供の魚離れを懸念していた店の方は、子育て世帯が魚を手に取りやすいサービスで子供向けの魚の幼児食を開発できないかと考えていた。そこで、Himi-Biz の支援のもと、加工食品開発に協力してくれる事業が見つかり、幼児食セット「totokito」が誕生した。

しかし、新たに起業したいと考えている人をターゲットにした移住促進にも課題はある。Himi-Bizの方によると、ビジネス初心者の方でも門を叩きやすい相談窓口が市内ではまだ限られている。そのため、Himi-Bizのような窓口が多くできれば、移住者の起業のハードルを低くすることができ、事業者同士のマッチングによる新規事業の創出が活発になるだろうと話して下さった。

まちなかに限らず、山間部でも移住者が活躍している例がある。「氷見キウイランド」という氷見市南西部でキウイを育てている農園がある。中国から移住してきた方が2019年より始めた事業である。現在は5ヘクタールほどだが、更に規模を拡大している。キウイの種類も数多くあり、正規の従業員も雇っており、事業に対する本気度が伝わってくる。ここはかつて運送業者が行っていた野菜農園の耕作放棄地であった。氷見市では現在、耕作放棄地が増加しつつある。この氷見キウイランドのように新規で参入してくる事業者が耕作放棄地を利用して果樹栽培等をする例があり、氷見には新しく事業を始められる土地も十分ある。

氷見市における祭礼行事やその他イベント

前述したように、氷見では獅子舞やまるまげ祭りなどの祭礼行事が盛んである。また祭礼行事に限らず、地域によっては独自のイベントを開催しているところもある。

富山県は獅子舞が盛んに舞われている地域であり、地域ごとに独自の特徴を持つ。勇壮で華やかな地域もあれば、静かにゆったりとした舞を行う地域もあり、その様子は様々である。独特のスタイルを持つ「氷見獅子」は従来青年団が主催して行うもので、青年団以外は獅子舞に関与していなかったが、若者の減少により青年団のみでは獅子舞を行うことができない地域も多い。現在では年齢制限などはなく、参加できる住民が行う形を取っている地区も多い。氷見の獅子舞は地区ごとという小さな単位で行われており、地域コミュニティの繋がりを強く感じることでできる祭りである。地域によって舞い方が異なる獅子舞を教え合う中で近隣住民との交流を深め、地域に溶け込むとともに氷見について知る機会となっている。若者が減少している現在、氷見に移住することで、獅子舞という伝統芸能に参加する機会も得ることができる。

続いて、まるまげ祭りについて紹介する。まるまげ祭りは氷見の中心部で毎年4月17日に行われる祭りである。北六町で古くから行われていた観音大祭に芸妓の巡行が付随して行われる祭りが、現在のまるまげ祭りである。まるまげ祭りには18歳以上(高校生を除く)の女性が参加することができる。また、北六町に住む子どもに限り、お稚児さんも巡行に参加することができる。お稚児さんの袴や冠は貸し出しがあり、舞や笛など祭りに向けた準備もないため、小さな子どもでも気軽に参加することができる。獅子舞やまるまげ祭りといった地域の行事への参加を通して、移住者は地域住民と関わり合うことができる。これは、移住者がより早く地域に溶け込むきっかけとなるだろう。

祭礼行事以外のその他のイベントとして仏生寺地区におけるカラーリング大会の事例を挙げる。仏生寺では、閉校になった旧仏生寺小学校にて地域づくり協議会が中心となってカラーリング大会が行われる。調査を行った2023年には11集落130名ほどの住民たちが参加し、住民同士の繋がりを深める機会となっていた。現在、氷見市では小学校区を基本単位とし23地区のうち、15地

区で地域づくり協議会が策定されている。このような組織は住民主体で運営され、行事に参加し、新たな地域づくりに関わることで移住者も地域に溶け込む手段となり得ると考える。

また、論田・熊無地区では「ろんくま移住促進委員会」という移住促進に向けて活動する団体がある。地域全体で移住を推進しており、富山県の移住者受入モデル地域にも指定されている。毎月5の付く日に「茶論(さろん)」というイベントが開催されており、ここで地域住民たちは会話を楽しみながら交流を深めている。論田・熊無地区のような中山間地でも、移住者を積極的に受け入れようとする動きがみられる。このような移住者が地域に溶け込みやすい環境があるのは重要であろう。

イベントを通じた地域交流と魅力

調査を通じて、氷見では様々な行事が行われていることがわかった。前述した獅子舞、まるまげ祭り、カローリング大会はいずれも移住者も参加することができる行事である。実際に参加することで移住者と地域住民との交流が促進される。

氷見を「若者の移住先」という視点で見ると、例えば女の子がいる家庭であれば、まるまげ祭りに参加することは、他ではできない子どもにとっての貴重な機会になり得るだろう。また、カローリング大会では他の地区の子どもと交流することができ、獅子舞においても、実際に獅子舞を舞うこともできる。地域コミュニティが密であるからこそそのイベントを通じた経験は子どもに好影響を与えることができるはずであり、これも氷見の魅力のひとつではないかと考えられる。

また、氷見には豊富な海の幸という魅力もある。特に寒ブリは全国でも名の知れた特産品である。そんな氷見では新鮮な海の幸を一年を通じて食べることができる。他にも魚のさばき方を学ぶことができる教室が開催されていたり、市が主体となって魚を人々に親しんでもらえるような企画があったりと、氷見は海の幸を身近に感じられるまちである。

4. 調査研究の成果

上述したように、氷見では人口が減少傾向にあり、市外に働きに出る人が多いというのが現状である。地域住民からは移住に関して、空き家問題や、雪国であることによる住みにくさが問題点として挙げられた。一方で、獅子舞やカローリング大会等の多様なイベントによる密な地域コミュニティがあり、移住者が溶け込みやすいまちであることがわかった。食文化にも恵まれており、特に新鮮な海の幸という点では他にはない魅力のあるまちである。商店街には移住者が経営する店も増えつつあり、氷見以外の出身の人たちによって新しいまちが形成され始めている。

5. 調査研究に基づく提言

これらを踏まえて、以下では今後氷見が若者に選ばれるまちになるための提案を行う。

氷見では移住者同士（移住希望者と既に移住してきている人）の交流が少ないことがわかった。移住希望者に対して、すでに移住してきた人との交流の場を設けることを提案する。移住に関して不安なことについて相談出来たり、実際に移住してきた人の生の声を聞いたりできる。このような企画によって、移住希望者は氷見の良い面・悪い面を移住者の実感を通じ

て知ることができ、より満足度の高い移住を行うことができると考えられる。訪問者と住民との交流の機会を広く打ち出し、移住者の方たちにパイプを担っていただくことで移住を希望する人々の第一歩を後押しできると考える。

現在氷見市では、移住に際してさまざまな種類の補助金と費用の免除制度が用意されている。これらの補助が移住者の移住決定の決め手となる場合もあるだろう。しかし、移住は人とのつながりと、地域に対する的確な理解によってこそなされるものであると感じる。場合によっては、補助金を減額してでも、人件費に充て、住民との交流の機会の拡充を図ることが、「若者に選ばれる」ことに繋がるのではないだろうか。

また、空き家問題と、働き口の少なさに関して、移住者による出店と店舗経営を促進することを提案する。調査結果からもわかるように、氷見では起業に対する支援が手厚く、既に移住者による新規店舗も多く存在する。従来にはなかった新しい氷見を移住者が作りつつある。このような状況を踏まえて、仕事がないのではないかという懸念に対して、氷見は自分で仕事を創出することのできる場であること、起業の敷居が低いことを広く押し出していくことが重要だと考える。それによって起業を考えている人の移住を促進することができ、移住者増加と地域振興の一石二鳥の効果を得られる可能性がある。また、一人で住むには向いていないような大きな空き家をテナントとして貸し出せるようにすることで、空き家問題の解決にも繋がると考えられる。

6. 課題解決策の自己評価

今回の調査ではまちなかや山間部など広い範囲で聞き取りを行い、地元の人に限らず移住者からも話を聞くことで多角的に氷見市の現状を把握することができた。今回の提言が今後の氷見市のまちづくりの一助となることを望むしだいである。一方で幅広い調査は実施できたものの、それぞれを十分掘り下げることはできなかったため、浅薄な調査にとどまってしまった可能性もある。